

## 新春特別号

お陰様で、一般社団法人日本造園建設業協会は  
2021 年 11 月に創立 50 周年を迎えました。  
記念行事は2022 年の総会を中心に実施予定です。

## 創立 50 周年 記念座談会

## “大義”に应运てきた日造協 2027 国際園芸博など機に新たな一步を

今回の座談会は、日造協が昭和 46 年 11 月 4 日に登記され、創立 50 周年を迎えることから、日造協創立以来、大変お世話になった方々にお越しいただきました。昭和 46 年は建設業法の改正で、土木から造園工事が独立した年でもあります。当時のことや今後の日造協、造園界がどうあるべきかなども含め、さまざまなお話を聞きたいと思っています。(座談会冒頭、和田会長あいさつより)

### 座談会出席者

伊藤 英昌 氏 (一財) 日本造園修景協会顧問  
佐藤 岳三 氏 元 (一社) 日本造園建設業協会技術委員会副委員長  
蓑茂壽太郎 氏 東京農業大学名誉教授、(一財) 公園財団理事長  
涌井 史郎 氏 東京都市大学教授  
和田 新也 氏 (一社) 日本造園建設業協会会長  
(司会) 成家 岳 (一社) 日本造園建設業協会 広報活動部会部会長  
オブザーバー：鬼頭 慎一 (一社) 日本造園建設業協会 副会長  
木上 正貢 (一社) 日本造園建設業協会 副会長  
田丸 敬三 (一社) 日本造園建設業協会 副会長  
藤吉 信之 (一社) 日本造園建設業協会 専務理事



座談会出席者

左から涌井史郎氏、蓑茂壽太郎氏、伊藤英昌氏、佐藤岳三氏、和田新也会長、成家岳部会長

## 「造園工事」の誕生と日造協

成家 会長あいさつにもありましたように本日は日造協の 50 年を振り返りつつ、今後を展望していただこうと思っています。少し自己紹介と日造協発足当時や日造協との関わりなどをお話いただければと思います。

佐藤 昭和 46 年は、日本住宅公団にいました。当時のことはつづさに覚えていませんが、緑のマスタープランなど緑に関するいろいろな制度ができ、公団の予算も増えました。それまでは少ない予算でやってきたので、増えたのはいいですが、緑の処し方について、勉強、理解などが不十分であったかもしれません。これは反省するところです。日造協では技術委員会に参加して、施工管理などに関わっていました。

伊藤 昭和 42 年に建設省に入り、都市計画法の大改正に伴う政令作成を担当

した後、江ノ島の現場にいたところ、本省に呼び戻されたのが 46 年の 6 月です。昭和 47 年に第一次都市公園整備五カ年計画がスタートしますが、準備の年で、その担当になりました。

当時は三好さん、西沢さん、塩島さんらの大先輩がおり、初代日造協会長の成家銀造さん、副会長の内山忠雄さん、事務局の前島康彦さんといった方々がよく来られていました。ガーデン協会など、日造協以前にも関係団体はありましたが、公益は日造協が初めてで、どう創るかなどの話をしていたんだと思います。それから 50 年、感慨深いです。

涌井 昭和 47 年 2 月に、東急の五島昇総帥と話をし、石勝エクステリアという会社をつくりました。昭和 46、47 年は、造園界の曙で、皆が走り始めた頃だったと思っています。

業の先輩方は戦国大名のようで、まずは目の前の戦に同業と競り合い、弱小の造園界が異業種の建設業に挑み競り勝つ方策をも睨んでいたようにお見受けしました。理論より実践で、全力で相手にぶつかり、それだけに相手も尊重する不思議な調和があり、日造協の設立時もういうまとまりを見せたのだと思います。

蓑茂 当時は大学 2 年生でしたが、造園の変化を就職を通じて感じていたのが僕らの世代だと思います。

それ以前は公務員試験に受ければ公務員というのが普通でしたが、僕らの頃は公務員試験に受かっても民間を選ぶくらい時代が変化していたので、日造協の設立が必要だったことが分かります。

協会との直接の関わりは、平成になってから多自然工法の研究会をつくる時に、造園の場合は「多自然」ではなく、「近自然」というべきだとお話しし、名称を変えてもらい、その後は平成 16 年から理事、最近は登録造園基幹技能者や建設

キャリアアップなどの事業に関係させていただいています。

一番印象に残っているのは、日本造園学会の会長だったときに、人材育成や社会貢献などで連携ができると考え、平成 20 年に当時の佐藤四郎会長と包括協定を結んだことです。それがきっかけで、現在も「日造協ニュース」に学会からの寄稿が連載され、技術フォーラムで学会の理事等がコメンテーターなどとして参加しています。

また、長く東京農業大学におりましたが、55 歳の時に熊本県立大学の理事長となり、人生が大きく変わりました。

成家 日造協ができてから数えると、和田会長は 2 代目、私は 3 代目で、設立当時を知る人は少なくなっています。その頃のことをもう少しお聞かせください。

伊藤 日本公園緑地協会が昭和 42 年に設立され、その頃、川崎市、浜松市、石川県、堺市、長崎県などで公園協会がで

## 謹賀新年

一般社団法人日本造園建設業協会

会長 和田 新也

令和四年の年頭にあたり



新年明けましておめでとうございます。令和 4 年のお正月を、皆様方におかれましては、穏やかにお過ごしのことと、お慶び申し上げます。

当協会は、昨年の 11 月で創立 50 年という節目を迎えることができました。

これも多く諸先輩方からの長きにわたるご指導、ご支援、そして会員の皆様のご尽力の賜物であると、深く感謝申し上げます。

また、近年頻発する大規模自然災害に備えた防災・減災への対応、造園業界の技術力アップを図るための資格制度の更なる充実、海外日本庭園の保全・再生、2025 年大阪・関西万博、そして APH (国際園芸家協会) の日本代表として関わる 2027 年に横浜で開催される国際園芸博覧会への協力など実に多くの課題に取り組んでいかなくてはなりません。

このような状況の中、協会活動も多大な影響を受け、総会、理事会、各種委員会等も書面形式や WEB 形式での開催を余儀なくされました。しかしながら、この経験は WEB 形式と対面形式の特質を実感でき、今後これらの形式をうまく使い分けて、運営していくという基盤づくりができたと思います。

また、コロナ禍において、新しい生活様式が求められる中、密を避けつつ、子どもから高齢者まで、あらゆる世代が身近にそして快適に利用できる公園や緑地などのオープンスペースは、必要不可欠なインフラとして、その価値が改めて見直されました。

さて、日造協が向き合わなければならない課題は多岐にわたります。SDG、カーボンニュートラル、グリーンインフラの推進といった新たな課題の他、担い手の確保・育成に向け、建設キャリアアップシステムへの対応、墜落制止用器具等の労働安全衛生対策の強化、時間外労働規制の建設業界への適用などにも適切に対応していかなければなりません。

最後にありますが、新型コロナウイルス感染症は、新たな変異株が発生するなど、予断を許さない状況が続いております。皆様におかれましては、健康には充分御留意していただくとともに、この一年が、皆様にとって、また造園建設業界にとって、明るい年になりますよう、心から祈念申し上げ、新年のあいさつとさせていただきます。



2022 年 新春座談会

き、その大きな流れの中で、昭和 46 年は業界側のリーダーとして日造協が発足する画期的な年でした。

その前年の昭和 45 年秋に全国都市公園整備促進協議会という自治体の組織ができました。公園整備は補助事業ですが自治体だけでは難しく官民の連携が必要でした。政治家が取り組み始めたのもこの頃で、与党に公園整備のための特別委員会がつくられました。こうした組織づくりをしたのが、大先輩の西沢さん、塩島さんです。

日造協の設立趣意書を今回改めて見たら「国策に沿って」という表現がありました。日造協の会長、副会長はその流れをよく分かっていらっしゃったし、会員もそれを理解してのことだと思います。  
**涌井** 当時、日造協の事務所があった渋谷の造園会館には、いろいろな人が集まって、僕などは場違いのような感じで、怒号が飛び交ったかと思うと笑い声も聞こえる不思議な空気が漂っていました。

その頃の造園は受注産業ではなく、どうやって需要を伸ばし、新しい仕掛けをつくるか、まさに僕の造語である“創注”産業として、緑化を政策の中にどうやって織り込むかを熱く語っていました。

そうした機運を理論化したのが後の衆議院議員の塩島大さんで、その政策構想と理論を行政や政治の世界に刷り込んでいったのが西沢さん、後詰が伊藤さんだったのではないのでしょうか。青雲の志のある戦国大名たちも肝心なところでは鎧を脱ぎ捨て、羽織袴の礼装できちんと対応し、新たな世界を築いていったというのが日造協初期の印象です。

**佐藤** 皆さんとても元気がよかった。その元気の証の一つが、塩島大さんが国会で活躍されたことです。

そして元気だけでなく、さまざまな制度などの勉強もきちんとされ、その対応は大変だったと思います。私の記憶にある方では、前田宗正さん、伊藤敏雄さん等が一步先を見て頑張られ、一緒に造園施工管理技士の養成などに尽力されました。

受講生は実技、経験、年齢差などいろいろな方でしたが、合格者を増やし、こうした基礎ができたことで企業としても確立していきました。



佐藤 岳三 氏

“大 義” に応えてきた日造協

設立から数年は本当に大事な時期だったと思います。現在も続いている全国造園デザインコンクールもこうした初期につくられ、とにかく前に進もうという意欲が感じられました。

**成家** 住宅公団の分離発注が業界の発展につながったという話を聞いていますが、そのあたりはいかがですか。

**佐藤** 私の知る限りですが、初めから造園工事として仕事が出ていました。赤羽団地などは完全な分離発注で、そういう制度をすでに持っていました。

**涌井** 住宅公団の設計技術は高く、それが分離発注をうながしたんだと思います。近代造園の林さん等が当時いらっしゃって、児童公園なども非常に前向きな設計をされていました。そういう方々が、これは設計と施工を分離できるとか、造園に分離発注できるということをしたのではないかと思います。

**伊藤** 住宅公団は昭和 30 年と早くにでき、今でも優秀ですが、当時まとめているいろいろなことができる技術者が揃っているのは珍しかったです。

昭和 46 年の建設業法改正で、土木から造園工事業が独立しましたが、植木と石を扱う伝統的な造園の枠を超えた

新しい造園の始まりでもありました。

昭和 47 年に始まった五カ年計画は、公共造園、公共公園と言うべき仕事で、伝統的な造園の枠を超えないとできない仕事でした。そのあたりも日造協はよく勉強したんだと思いますが、20 年くらいにわたって、修景施設や設備など、造園ができる分野を少しずつ広げていきました。建設業法で位置付けられるものを少しずつ変える努力を日造協が続け、新しい建設業法の中でやっていけるような形をつくり出していきました。

それから時代を下って平成 6 年に造園は建設業法の指定建設業になりました。これは土木、建築と並んで、元請けになれるという制度ですが、伝統的な造園のままだったらできなかったことで、専門工事という枠を超えていたからこそできたことでした。

造園工事業の中に、修景施設、建物、広場、園路、噴水などが例示され、それができるようにしてあります。

これまでの造園の枠を超えることに反対する方々もいたようですが、日造協は新たな道を選びました。将来への方向付けは、節目を迎えた今の日造協にとっても大きな課題だと思います。



伊藤 英昌 氏

造協をお願いすることになったわけです。

木村英夫さんが委員長になってくれたと思いますが、日造協の協力で素晴らしい日本庭園ができ、イギリスがとても喜んでくれて、最高賞をいただくとともに、その技術力が世界的に認められました。

日本はまだ AIPH（国際園芸家協会）に加盟しておらず、イギリスが AIPH に日本を入れるべきと主張し、当時の会長だった和田貞次さんに、日本を代表して加盟していただけないかと、お話ししたところ引き受けてくれました。

AIPH に加盟していないと国際園芸博を開催できませんが、日造協の加盟により日本で国際園芸博覧会を開催することが可能になり、アジア初の大阪花博につながっていきます。

大阪花博は大成功で、日本庭園が世界から脚光を浴び、花や緑は世界から人を集めることができると、その後の中国、台湾、また、日本でも淡路、浜松と花博が引き続き開催されました。2027 年に大阪と同レベルの花博が横浜で開催されようとしています。

さらに日造協がよくやったと思うのは、造園建設業の社会的な地位を向上させるために先進的な日本造園建設業厚生年金基金をつくったことです。よく勉強して現在の体制をつくってこられたと思っています。

**和田** 日造協がうまく機能して初期の造園界をつくり、それが今の造園界の発展に繋がっていったことが分かります。  
**伊藤** 大阪花博は経団連まで動かして開催しました。当時の政財界は、造園が政治力を持っていることを知っていたので、ものごとが動きました。

会長がおっしゃったように、そういう人と仕組みがありました。個々の人としてのお付き合い、組織同士の連携がきちんとできていたと思います。人脈と組織はいつの時代でも大事です。自治体の長は 4 年に 1 回、選挙があり、民意に応えられていないと落選します。

公園は利用者がいっぱいいますし、安全で楽しく過ごせる場所をつくるのは、これまでもこれからも大切なことで、こうしたことにともに取り組んでいくの

造園施工技術の向上と AIPH への加盟

**佐藤** 建設業法の改正はとても大事で、造園が 28 業種に入って発注しやすくなり、例示の改正などがどんどん行われました。今後どうなるのか分かりませんが、大切な指摘です。

**伊藤** どういうものが仕事の対象になるのかを大いに議論しなければならないと思います。日造協ができて最初の頃は、問題や課題を会員に一生懸命に聞いています。当時は分離発注、分離発注と盛んに言っていました。現在は状況が代わり、分離発注と指定建設業としての元請けの立場は異なりますし、会員の意見はどうなのか、どちらがいいのか、つかみ切れていないと思います。

当時の日造協で特に凄かったのは建設業法に対する取り組みと、公団の公園緑地部創設への応援だと思っています。

昭和 56 年頃は、行革で新しい組織をつくるのは困難でした。都市公園整備の事業費は、一般会計の税收頼りで、簡単に伸ばすことはできません。道路や河川は財政投融资で、特別会計でできる仕組みができていました。

公団の意義は、お金を借りられる組織であるということと、技術者がいることです。公園事業の 9 割以上は補助事業で自治体発注になります。今も造園技術者が十分でない自治体がありますが、当時は今よりも不足していましたから、必要とされる公園をきちんとつくるためにどうしたらいいのか、そういう執行体制をどうつくるかが大きな課題でした。そこで参考にしたのが下水道事業団です。

下水道事業も高度な技術を必要としま

すが、それぞれの自治体に専門家がいないわけではありません。下水道事業は直轄はなくすべて補助事業なので、全部自治体発注になりますが、事業団が仕事を受ける仕組みがありました。その仕組みを使えば、公園もきちんとした技術でつくることができると考えました。

これが公園緑地部をつくった大きな目的で、業界も応援してくれ、1 年では無理でしたが、2 年目にできました。こうした経緯を初代の理事も知っており、大きなプールの工事なども造園で発注され、これによって技術者が養成でき、並行して監理技術者も養成できました。

その時に頑張ってくれたのが東京農業大学の本間先生で、田中斎さんやいろいろなメンバーを集めて、何もないところから、国家試験用のテキストを作成され、技術検定制度に活用され、日造協でも講習会が行われるなど、これも画期的でした。

もう一つのエポックは、エリザベス女王になって初めての博覧会がリバプールで開催されることになりました。

初め日本は参加しないと断りました。しかしイギリスから日本庭園を何とか出展して欲しいと強い要請があり、たまたま通産窓口の友人と何とかできないかと相談していたところ、当時都市局長だった加瀬正蔵さんが、伊藤君何をしてるのかねと声を掛けてくださって話をしたら、イギリスに協力してあげればいいじゃないかということになり、都市緑化基金を使い、足りない予算も局の中で調達することができました。しかし、都市緑化基金には施工能力がなく、そこで日

支部長

北海道	青森県	岩手県	宮城県	秋田県	山形県	福島県	茨城県	栃木県	群馬県	埼玉県	千葉県	東京都	神奈川県	山梨県	長野県	新潟県	富山県	石川県	岐阜県	静岡県	愛知県	三重県	福井県	滋賀県	京都府	大阪府	兵庫県	奈良県	和歌山県	岡山県	広島県	鳥取県	島根県	山口県	徳島県	香川県	高知県	愛媛県	福岡県	佐賀県	長崎県	熊本県	大分県	宮崎県	鹿児島県	沖縄県
三浦	米内	古積	鈴木	今野久仁正	佐久間	水庭	増田	山田	森川	伊藤	鈴木	田口	依田	山寄	磯部	久郷	北総一朗	中山	内山	中嶋	水谷	南	上田	高石	坂上	入谷	今西	的場	小林	福島	西谷	持田	多々良健司	稲富	藤田	植田	高須賀盛満	内山	久保	松田	吉村	栗木	下湯	井上	森根	
利史	吉榮	昇	和男	洋	博	博一	忠雄	昌紀	高広	義人	正典	忠	信幸	久人	愼治	忠	晴芳	和敏	春海	雅義	誠	正弘	信明	芳郎	康彰	盛州	和義	慶一	勝之	正樹	俊広	秀樹	誠司	剛敏	和男	英明	昌洋	康一	一弘	恒治	清昭					



# 2027 国際園芸博など機に新たな一歩を

は、民意に沿うことであり、ニーズを掴んで、広くアピールしていくことも大切だと思います。

**蓑茂** お話を聞いていて“大義”があったからだと感じました。政官民のトライアングル、連携というと変に誤解する人もいますが、大義をちゃんと抑えています。それができたのは日造協だからで、小さい団体では誰も相手にしてくれません。大義を貫けば、これからもできることはあり、ニーズがあってやることと、その前のウォンツがあってやることを考えるのが、これからの日造協の展望につながっていくのだと思います。

**涌井** 伊藤さんや蓑茂さんがおっしゃった通りで、先輩方は青雲の志で、何もないうちで制度を先につくった方が勝ちとばかりに、政策へと体系化する能力が非常に優れていました。

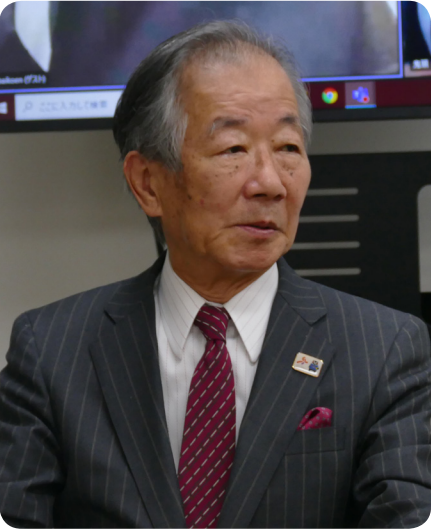
トライアングルの構造は、それぞれの持ち味があるわけですが、日造協の親分衆と理論派の先輩たちは混然一体となって、その持ち味を発揮していました。

当時は朝食会が時おり開かれ、そこには政治家と建設省の幹部が並び、業界は端っこの方において、偉い方が「国民の声を聴いてるか」と言えば、「緑に対する国民の要望は強いものがある」と担当者が答え、「具体的な施策と予算はついてるのか」などの問答が続き、誰も反対する人などいません。そこには造園なんて一言もなく、社会はこうあるべきという大義です。

**伊藤** 朝食会では、いろいろな話があり、和気あいあいと意見交換がされていました。当時は道路で子どもたちが遊び、自動車の普及に伴って交通事故が増え、安全な遊び場が求められましたが、予算がありませんでした。

そこで先輩方が安全な遊び場をつくるために交通反則金を公園整備に活用しようと考え、これに賛同したのが、全国団体の婦人団体協議会でした。全国都市公園整備促進大会もその始まりは、昭和40年に開催された都市公園整備促進全国婦人大会で、5回目くらいから婦人の名称がなくなって、子どもたちの遊び場から都市公園という本格的な公共事業の世界に入っていました。

ですから、蓑茂先生の言うように時代



蓑茂 壽太郎 氏

の大義があり、それに乗ったというか、必要だから何とかしようとしてきて、それが結実したのだと思います。

**涌井** 造園とか自分たちが先ではなく、やっぱり大義なんです。社会はこうあるべきだと。そして業としては、協会や各社で例示をいっぱい考え、用意していました。だから、造園工事としてそれを果たすことができたんだと思います。

**伊藤** 昭和46年は環境庁ができた年でもあり、公害問題から工場と住宅地との間に緩衝緑地をつくることもしました。大きなものでは、姫路、市原、大分、四日市、徳山につくりました。

工場を有する企業から負担金をいただき、国費と合わせて実施しましたが、ここでも造園は前面に出てきません。公害防止の緑地整備が目的で、仕事をしたのが造園でした。そういう世の中のニーズを掴むことが大事です。

**涌井** 日造協は社会のニーズを掴み、一層大きな波にすることが大事で、必要な戦略だと思います。地球環境問題が一般化し、NbS (Nature-based Solutions) あるいはワンヘルスといった言葉がグリーンという冠詞をまとうって喧伝されている今、一番いいチャンスです。

**蓑茂** 司馬遼太郎の文学で言うところの98%が事実、2%がフィクションです。緑の必要性も98%は事実を積んでおいて、2%に人々を惹きつけるものを積み込む

でよくと魅力的になる、そういうことだと思うし、できると思います。

**伊藤** 2010年の愛知万博で、それこそ涌井さんのプロデュースで、バイオリンができましたが、ああいうものがもっとあってもいい。2027年の国際園芸博が一つの契機になると思いますし、関係団体と力を合わせてやるべきですね。

**佐藤** 日造協の実態調査の話がありましたが、現在も続けていますか。会員の増減などはどうでしょう。

**和田** 調査は続けており、会員数は最盛期が約1600社で一時800社近くまで落ち込みましたが、現在900社弱まで回復しているところです。

**佐藤** そういう実態調査を踏まえ、課題などを整理して活かすといいですね。

**蓑茂** 設立当初は、400社ちょっとだったと思います。僕は地方に行きよく分かりましたが、業界の一番上に日造協に属している方がいて、その下に県造協、その下に業界団体に属していない造園会社があるという構造ですが、市民から見たら同じ造園です。日造協が頑張ってきたから、今の造園がありますが、そういうことは知られていません。

支部や県造協も行政と一体となって考えないとなかなか力が出ない。東京の緑化業協会などはよくやっていると思いますが、そういう行政との連携をもっと進めるといいですね。

## 造園の枠を超え、建設業に捉われない公民連携

**涌井** リーマンショックなどで、公共発注が縮小されていったときに、頑張ったのは地方だと思います。地方は政治や他の業界との親和性も高く、造園工事を増やせとか直接的な活動より市民の側からみどりや環境問題の勉強の機会や働きかけを強め、結果的に自らの仕事にも繋がっていく、今でいう「論語と算盤」みたいなことがあったのではないかと思います。そういう取り組みを十分練り、活動してきたのが、地方の業の人たちであったと思いますが、仕事は、ピーク時と現在でそれほど変わっていないのではないですか。

**和田** 工事は減っていますが、それ以外の委託や指定管理など大きく広がってきていると思います。その辺は、涌井委員長時代の戦略委員会で作ってもらったものだと思います。

**涌井** そうですね。横に広げることが今できることです。

**和田** 委託や指定管理も国策で、大義に沿ったものなんだと思います。

**伊藤** 最初の五カ年計画から50年が経ち、当初24,000haだった都市公園の面積は130,000haになり、ストックの活用と言われていますが、本当はまだまだ足りていないと思います。ただ、整備したものをきちんと活用することは大事で、その努力が欠けています。

家の近くの公園をよく利用しますが、

草がぼうぼうで、フェンスが破れていたります。気にしていないのか予算がないのか分かりませんが、お金なら集める方法を考えればいいんです。

公園施設の長寿命化という考え方がありますが、やはり適切な管理は欠かせませんし、公園施設は造園の範疇にあるのだから、今あるものを活かすことも含めて改修などを進め、新たな提言も必要だと思います。

行政への提言は、首長に直接言う方法もありますが、きちんとした手順で進めることが大事です。そういうチャンネルを持っていないとできませんが、地方の場合は議会が一番いいと思います。ただ業界で提案するのではなく、利用者である市民と一体となった提案がいいです。黙っていても何にも始まりません。

例えば、日本に400くらいのお城があり、ほとんどが公園になっていて、場所もいいところにあります。こうしたお城は、自治体にとって有力な資源です。いい提言なら予算もつくし、別のお金も動くでしょう。

**蓑茂** 熊本城の復旧復興は、都市公園の施設だからできたことで、文化財だけでは予算がないので現在のような復旧はできませんでした。

**和田** 日造協はこれまで造園業の発展に向け、さまざまな主張をしてきましたが、次の展開ができていません。

賀 春

一般社団法人日本造園建設業協会

会長 和田 新也

副会長 鬼頭 慎一

専務理事 田上 正貢

業務執行理事 伊藤 吉三

理事 藤吉 敬之

理事 木上 正三

理事 鬼頭 慎一

理事 和田 新也

理事 山田 拓広

理事 正本 大昇

理事 卯之原 幸男

理事 伊藤 信之

理事 藤吉 敬之

理事 田上 正貢

理事 伊藤 吉三

理事 木上 正貢

理事 鬼頭 慎一

理事 和田 新也

理事 山田 拓広

理事 正本 大昇

理事 卯之原 幸男

理事 伊藤 信之

理事 藤吉 敬之

理事 田上 正貢

理事 伊藤 吉三

理事 木上 正貢

理事 鬼頭 慎一

理事 和田 新也

理事 山田 拓広

理事 正本 大昇

理事 卯之原 幸男

理事 伊藤 信之

理事 藤吉 敬之

理事 田上 正貢

理事 伊藤 吉三

理事 木上 正貢

理事 鬼頭 慎一

総支部長

監事

理事

業務執行理事

専務理事

副会長

会長

北海道 東北 関東 中部 近畿 中国 四国 九州

森根 執行 高須 賀盛 正本 井内 中嶋 久郷 加勢 米内 嘉屋 渡邊 矢野 田雑 米内 山田 森根 藤巻 西谷 成家 中山 中嶋 月山 高須 賀盛 鈴木 義人 執行 佐久間 坂上 信明 古積 憲司 黒田 憲和 久保 慎治 北郷 総一 嘉屋 幸浩 金清 典充 加勢 充晴 大嶋 啓聡 宇坪 啓造 井内 優 有路 拓 山田 拓 正本 大 卯之原 幸男 伊藤 信之 藤吉 敬之 田上 正貢 木上 正貢 鬼頭 慎一 和田 新也



## 組織と人のプラットフォームの役割を担う

**成家** すでに今後の展望についてのお話があり、Park-PFI、SDGs、地球環境問題への対応など、対象分野が格段に広がる中で、協会や業界の発展について、さらにご助言をいただければと思います。

**涌井** 建設業の枠に捉われずにと話しましたが、論語には「祖型忘れず」という言葉もあり、日造協も時代とともにある造園建設業であることを忘れてはなりません。

ただ、造園建設業という形で社会にアピールすると、我田引水だと思われてしまします。造園・環境緑化産業振興会のような組織がしっかりしていれば、例えば“公園マネジメント会議”など、市民などのステークホルダーが参加できる組織を我々が黒子になり、その仕組みや資金をつくり、市民のニーズを把握できるようにすること望ましい。我々の先輩たちは眼前の利を追うばかりではなく、そうした戦略性をも追求しました。

先のCOP26など、吸収源としてのみどりの存在が高まりを見せる中、造園には関係がないと言われる方もいるかもしれませんが、街路樹も都市公園の樹木も都市林のカテゴリーにあるわけで、そういったものに我々が貢献していることをアピールし、新しいライフスタイルを演出する舞台ともなる公園緑地の利用の効用を高める手段としての公民連携を大いに進め、市民と一体となってリバブルでウェルビーイングな環境づくりの運動体をつくるのも1つではないでしょうか。

そこでは日造協では言えないようなことも発信できると思いますし、我々はその果実を拾っていけばよい。各社や建設業という業界ではできない、あるいは耳を傾けてもらえないそうした領域に積極的に踏み込んでいく覚悟が大切なのではないでしょうか。

**伊藤** 涌井先生の発言に賛成です。この分野はものすごく工種が多く、量が少ない。多工種を全部自分でやろうとすると不得手になってしまうかもしれませんが、造園は指定建設業ですから、全部やろうとせずに、自分たちがプラットフォームになる考え方もあります。

日本建設業団体連合会、日本土木工業協会、建築業協会が2011年に（一社）日本建設業連合会と1つになりました。1つにまとまった方が外に対する力は強くなります。造園・環境緑化産業振興会は横の連携で1つの組織ではありません。関連団体のそれぞれの機能、役割をどう果たすかを見直すことも必要です。

そういうことを考えるために涌井先生や蓑茂先生がいらっしゃいますし、僕と同年代で活躍されてきた方々も皆いい歳になっていますが、それなりの経験、人脈とチャンネルがあります。

国際的な取り組みもAIPH以外にWorld Urban Parks Japanなど、多様な団体があり、頑張っておられる方がおられますし、これらを活用しない手はありません。国際連携に負担金を払い活用しないのはもったいない。もっと使いましょう。

**蓑茂** これまでの50年は拡大する時代で、拡大は分化を伴い、設計、施工、さらに運動施設、公園施設、植木、水景など、拡大分化の流れだったと思います。

これによって、それぞれが先鋭化し、一定の成果があったと思いますが、この先これを突き進めても限界があるのではないかなというのが率直な思いです。

どこかで統合というワードを使いながら考えることが必要で、その一つが資格試験です。それぞれの分野の資格がありますが、レベルが大事になります。

建設キャリアアップでは、レベルを問うようになっています。例えば大学だと、昔は助手、講師、助教授、教授。今は助教、准教授、教授などの職位がありますが、これからは資格についてもこの職位の考え方が注目されるでしょう。建設キャリアアップでは、レベル4の日当はいくらなどときちんと示すような方向ですから、こういう職位を意識して、関連団体が共通のこととして取り組むといいと思います。

この先60周年、75周年とどのタイミングか分かりませんが、そのときにどんな姿かを社会の情勢も考えながら、議論していく必要があると思います。

勉強会はいくつかのところで開かれています。勉強して議論はしますが、行動に結びついていません。どんなことでもいいから、“学び”“考え”“行動する”をワンセットにして、いろんなことをされるといいと思います。

今、コンサルタントの方々と公園の樹木をどうするか検討しています。これもガイドラインやマニュアルを作るだけではだめで、どこか社会実験の場所を設定して、なるほど公園の樹木は植えるだけではなく、手入れをしてこそ素晴らしい風景ができると理解してもらわなければならないと言っています。

また、専門職は大事ですが、最近では土壌と植物はもとより、複数に通じた多能職の時代になっており、そうならないと効率化、生産性の向上にはつながらず、働き方改革も実現できません。分化から統合、専門職から多能職、これらを踏まえて活動されるといいでしょう。

**佐藤** 皆さんのいう通りだと思います。気になるのは、会員の共通認識というか、同じ造園業として、会員企業が利益を上げていかなければならないときに、当初の日造協が建設業法や施策について、周知を図ったように、必要な情報を適切に共有できるかと思っています。

新しい言葉がどんどん出てきて、SDGs、ダイバーシティ、スマートシティ、デジタル田園都市構想など、何のことかわからないものが多くなっています。

しかし、新たな社会や都市のあり方として提示されているのですから、そうした社会や都市において造園がどうなるのかを考える必要があります。

涌井先生が言った都市林、蓑茂先生の樹木管理についても、日造協の会員が、きちんと理解していることが大事で、だからこそ議論ができ、発注者が仕事を任せられる存在たり得ると思います。

造園学会の『ランドスケープ研究』には、3.11ポスト10年に関するものなど涌井先生と蓑茂先生がいろいろと考え方を示されています。造園の展開方法、方向性の示唆とも受け取れます。ぜひ、一読していただきたいと思います。

話がそれましたが、日造協には多くの会員がいて、新たな言葉や政策に自社で対応できるところと、そうでない方々がいらっしゃるので、広報などで適宜解説するのもいいでしょう。その時は、分かりやすい言葉と分かりやすい方法で進めて欲しいと思います。

全国技術委員会に出席された方の中には、大切な資料を持ち帰っても支部会員には伝わっていないという実態もあったようです。そういう残念なこともあったので、会員が一体となって取り組めるようにしていただきたい。

**成家** せっかくですのでオンライン参加されているお二方はいかがですか。

**鬼頭** 貴重なお話を聞いておりました。仕事量や仕事の変化の話がありましたが、大都市と違ってローカルな県は少子高齢化も深刻で、大規模工事はどんどんなくなっています。観光が期待の一つですが、自然が目当ての方も多く、アウトドアメーカーの施設の集客力が高いです。

お城の話もその通りで、余り整備されていなかったところに人が来るようになり、そういったところの繁茂した樹木の手入れ、園路の確保などが仕事になっています。

**木上** 皆さんの言う通り、50年前は造園工事がなく、土木工事で仕事をしていました。それが造園工事になったことは画期的で、その後業界が成長し、50周年はちょうど変わり目なのではないかと思っています。ぜひ、先生方に素晴らしいヒントをいただければと思います。

**和田** 最近の日造協を振り返ると、資格制度や社会への発信も行っていますが、先行きに不安を感じるのは、これらの取り組みの将来像がはっきり見えないことにあるのではないかと考えています。

しかし、涌井先生がおっしゃられているように、緑に関しては追い風が吹いており、我々はアイデンティティを失わずに、緑の重要性を伝えていくことが今一番大切で、2027年に横浜で開催される国際園芸博が今後の造園にとって非常に意義のあるものになると思っています。

**涌井** バイオフィリックデザインが世界に浸透してきています。デジタル社会になり、デジタル疲れを起こし、アナログやリアルだったり、シームレスなものへの憧憬が非常に強くなるからです。パソコンに向かって仕事をしていると、目だけでなく、心も疲れてくるんです。それで自然や緑に触れたいという要求が高まります。

GAFAの本社には、どこも植物園かと思うほどの緑があります。そういう意味では、デジタル化すればするほど、鬼頭さんのお話にあった自然を求めての観光など、造園が携わる空間への欲求が高まるということを私たちがチャンスとして捉えていくことが欠かせません。

**佐藤** デジタル化やAIなどは、私たち一般人が便利だと感じる以上に技術が進歩し、生活者の心理と乖離してしまっている部分があり、それがストレスになっていることも多々あると思います。

そこに涌井先生がおっしゃるような造園の出番があるのかもしれませんが、さっき言った新しい言葉もそうですが、これらに対して造園がどういう提案をしていくか、していけるかが大事で、仕掛けていく必要があると思います。

**蓑茂** 先日山形に行ったときに草木塔を見ました。ああいうものがバイオフィリックデザインなどに関係してくるのではないかと思います。草木塔のいわれは諸説ありますが、米沢藩の江戸屋敷が焼失し、8年後に米沢で大火があり、建て直しのために多くの木を伐採したことから、草木に感謝し成長を願ってつくられたそうです。日本には食事の際に「いただきます」という文化がありますが、そうした関係もあるでしょう。



和田 新也 会長

バイオフィリックデザインにも関心を持って、社屋と圃場があるなら、圃場の中に社屋があるのもいい。だいぶ前から造園界では、圃場を活用した植物園構想などもやってきましたが、そういうことをもっとやっていくといいですね。

もう一つは、伊藤さんが言われていましたが、政策支援により協会は支えられ頑張ってきたのだと思います。政策支援と両輪になるのは各社の企業努力です。造園業界の企業努力はどのように生みだされるのかということを、50年を機に考えてみるのもいいのではないかと思います。

日造協の地域リーダーズは、企業の枠を超え、やがて経営に携わる若手の育成、経営資源を育む取り組みと理解しており、とても共感を覚えます。一人で悶々と考えてもいい発想は出ません。お互いを刺激しあうことによって育めるものなので、大切な活動だと思います。

**伊藤** これまでの話から、枠を超えることが大事だと感じました。

また、プラットフォームの話もありましたが、プラットフォームには、組織と個人の2つがあると思います。

オンラインによる会議がコロナ禍で普及しましたが、大変な仕事、新たな仕事をするようになったら、人間性が大事で、あの人は何を考えているかわからないということでは、おっかなくて仕事になりません。人としての付き合いなしにいい仕事はできないと思っています。

そういう人間のプラットフォームには官の人の参加も欠かせないと思いますが、こそこそやったらだめで、きちんとした組織をつくり正々堂々とやるのが大事です。日本造園修景協会が毎年、造園界の新年会を行っているのもこうしたプラットフォームとしての役割ですが、力のある日造協ならもっといろいろなことができると思います。

最後に一言ですが、都市公園整備費の記録を見たら私が現役の最後の時が一番大きく、日造協の会員数もピークになっていました。都市公園整備費が減り、日造協も2世代目、3世代目になりましたが、日造協とともにあった50年で大変感謝しています。ありがとうございます。

令和4年は寅年。虎は一日に千里を走るといわれます。組織と人のプラットフォーム、2027年の国際園芸博、海外の日本庭園など、いずれも日造協なしにはできないことです。日造協も虎の勢いで頑張っていきたいと思っています。

**和田** 今後の展開についてもご意見を賜りました。意見として終わらせず、実行に移していきたいと思っています。

**成家** お聞きしたいことはまだまだありますが、時間が尽きました。長時間、貴重なお話をありがとうございました。